

## ポーランド寸描

内 藤 博 夫

繊維工業地理に関する国際会議に出席のため、1981年10月6日の午後5時、ワルシャワ空港に到着した。当初はバスで空港から市内に入る予定であったが、送迎ロビーに出たとたんタクシーの運転手につかまってしまう、「乗りませんか」としつつこく勧誘された。夕暮れどきでもあったのでバスを探すことはあきらめ、タクシーに乗ることにした。運転手氏は35才ぐらい、身長は日本人とほぼ同じで、紺の作業帽と紺の作業服という服装だった。「ドルで払ってくれば割安料金で乗せて上げますよ。」と切り出してきたのには驚いたが、手持ちのドルはトラベラーズチェックにしていたのでこの申し出はことわった。

15分ほど走ってタクシーはワルシャワの中心部に入り、目の前に37階建ての壮大な文化科学宮が現れた。この建物はガイドブックには第2次大戦後、ソ連がポーランド国民への贈り物として建てたものと書かれていてある。このことを確認する意味で運転手氏にたずねたところ、「言われる通りです。しかし polish money で建てたのです。」という答えだった。彼の回答の意味がよく呑み込めなかったもので、さらに質問しようと思ったのだが、車は目的地のワルシャワ中央駅に着いてしまい、それ以上の会話のやりとりがないまま別れてしまった。

文化科学宮はソ連の贈り物なのかどうか——このことが疑問として残ったので帰国後、ポーランド事情にくわしい知人のY氏にたずねてみた。Y氏によると、ソ連軍は第2次大戦中、ポーランド人パルチザン（ドイツ軍に対する抵抗組織）と共

同してドイツ軍をポーランド領内から駆逐するが、その際パルチザンに対して武器援助を行った。この援助は有償で行われたため、戦後、ポーランド政府は援助の返済を行った。その過程でポーランド政府がソ連の了解を得て返済金の一部を文化科学宮の建設資金にあてた可能性は十分にあるということだった。Y氏の推測が正しいとすれば、文化科学宮がポーランドの資金で建てられたことは事実としても、それはもともとソ連に帰属すべき資金の一部であるから、贈り物説にも一理あることになる。ポーランド滞在中に聞いた小話に「ワルシャワの眺めは文化科学宮から見下ろしたときがもっとも美しい。」というのがある。この小話の真の意味は「ポーランド人にとって文化科学宮はもっとも目ざわりな存在」だということである。なぜなら首都ワルシャワのどまんなか、一見してロシア風とわかる高層ビルがそそり立っているからである。文化科学宮に対するこのような評価がポーランド人の中に広く行きわたっているとすれば、この建物はソ連・ポーランド両国民の友好のシンボルとしてではなく、ソ連の大国主義のシンボルとして機能していることになるだろう。文化科学宮の建設に関してタクシー運転手がもらした言葉の中に、ポーランド人の反ソ的気分が反映されているとみるのは行きすぎであろうか。1981年12月13日の戒厳令の布告により、ポーランドは再びソ連の圧倒的影響下におかれることになった。ポーランドが精神的にもソ連から独立する日がいってくるのか、今後の情勢の推移に注目したいと思う。